

稲葉武司の建築教育研究の学際的意義について 専門主義時代の「総合」への希求

The Interdisciplinary Significance of Takeshi Inaba's Research on Architectural Education The Aspiration for "Synthesis" in an Age of Specialization

○伊藤 綾香¹, 田所 辰之助²,
Ayaka Ito¹, Shinnosuke Tadokoro²,

Abstract: Ken Inaba is an important figure in the history of architectural education in Japan. He views architectural education not simply as a specialized educational activity, but as a tool for cultivating critical thinking, and has consistently advocated the possibility of bringing "comprehensiveness" to the entire educational world. Inaba's pioneering research and efforts, which transcend the boundaries of specialized fields, demonstrate a more universal and essential perspective of "comprehensiveness" and "cultivating critical thinking," and will likely serve as an extremely important guideline for architectural education in the future.

1. 研究の背景と目的

建築教育の対象が専門学生から市民・子どもへと拡張したのは1990年代以降である。筆者は「伊東豊雄 子ども建築塾」やJIAの地域会が行う「子供空間ワークショップ」など、大学外の建築教育に深く関心を寄せてきた。より良い建築とまちづくりのために建築教育が市民一般に普及することが不可欠である。本稿は、現状の建築教育が抱える構造的な課題を明確にし、その解決の糸口として、稲葉武司氏の研究が示した普遍的かつ学際的な建築教育のあり方の手がかりを導くことを目的とする。

2. 日本の建築教育における「専門性の拡大と内閉」の構造

日本の建築教育は、明治期の工部大学校以来、専門家育成の道を歩み、その言説は長らく大学の専門教育と中堅技術者（初等・中等教育）養成の二分野に限定されてきた。建築学会が活動目的に「建築の社会的役割と責任を自覚し人々に貢献すること」や、「良質な社会的役割と責任を自覚し人々に貢献すること」、「良質な社会資本の充実と公共の利益のために努力する」といった文言を掲げたのは1999年であり、建築教育の対象が子どもや専門外の一般社会に目を向けるまでには多くの時間を要した。

しかし、教育の対象が拡張された後も、その活動は細分化と専門化の傾向を辿っている。例えば、近江栄氏の社会人教育、斎藤公男氏の構造子ども教育、広川智子氏の1/10木造ワークショップなどの活動は、いずれも建築教育の対象を広げながらも、その教育内容や実施主体が専門知の啓蒙という色合い強く持っている。問題は、こ

れらの活動が建築界における個別の専門分野に根差しているため、その専門知から外れた建築の専門家が、そうした取り組みに興味を示しにくい点にある。教え手側の意識にムラが生じてしまう事実を見ても、建築教育が専門家以外の広い層に浸透しにくい一因であることが示唆される。さらに、受け手側の実態を見ても、例えば「伊東豊雄 子ども建築塾」のような著名な活動においても、応募者は元々建築に興味のある保護者がほとんどである。また、各地で行われるワークショップ等に興味を示す層も限定的であるのが現状だ。これらの状況から、現在の建築教育は送り手・受け手双方において限定的であり、真に幅広い層に建築の持つ教育的価値を届ける上で、その普及が課題となっていると指摘できる。建築の持つ多様な側面が、子どもたちの思考性を育む素因として活用され、より普遍的な教育的価値を提供するために、既に存在する教育実践を正しく整理し、その汎用性を広く認識するための意識変革が急務である。

3. 稲葉武司の建築教育論：専門性を超える「総合知」の探求

稲葉氏の研究は、このような「専門性の個別化」に対し、建築教育の役割を「普遍的・総合的」なものへと変革しようとする明確な思想的基盤を持っていた。氏の論考を一次資料に基づき分析することで、その思想的基盤を明らかにする。

3.1) 総合的学習のための「建築と子どもたち」カリキュラムの輸入

総合的学習とは、幾つかの内容を横断的にひとつにまとめて指導する形態のことを指す。その際に複数の

1：日大理工・院（前）・建 2：日大理工・教員建築

教科の枠を外してひとつに束ねるバインダー（上位科目）が必要であり、そのバインダーの役割をアン・テイラーが1990年に開発したカリキュラムである「建築と子供たち」が担う可能性がある」と稲葉氏は提言している。

プログラムの学際的解釈について、氏は「建築には生活と密着した具体性があり、理科や算数の原理の応用がたくさん使われていますので、教材としてとても手頃なのです。総合的な問題発見・解決の力を身につけさせるための学習なので、建築の勉強をするわけではありません。」^[2]と論述し、このプログラムが「建築の早期教育」ではなく、建築を素材とした総合学習であることを強調した。建築という身近な環境から「理科や算数の原理の応用」を学び、「総合的な問題発見・解決の力」を養うための教材として捉えたのである。この解釈は、プログラムの学際性と汎用性を重視し、「建築専門知の普及」という枠組みを超えようとする氏の意図を明確に示している。この点は田口純子氏^[3]も学際性がもたらす建築教育の発展に可能性を見出し、テイラー氏のインタビューを行っている。

この「建築と子供たち」を稲葉氏が日本に持ち込み、具体的な実践方法を伴い紹介できたこと、また、その時々日本の教育で求められていた能力や授業のあり方に合わせることでできた柔軟性から、日本で広く普及したが、理論的基盤を真に理解し、実践された活動は乏しく、形式だけが輸入されてしまうことがほとんどであったようだ。

3.2) 脳科学に基づく空間認知能力の研究

そもそも氏の建築教育への興味は、大学の設計教育の教鞭をとる中で、学生の子どもの頃の空間体験と設計能力の因果関係に着目したことに始まる。氏は、建築学生の空間把握能力を、脳科学的知見をもとに研究した。この研究は空間把握能力が優れた学生をメインの対象としているのではなく、空間把握能力が疎い学生、すなわち「建築の素養」が低いと見なされがちな学生を主な対象としており、個性によらず誰もが空間を理解する普遍的な基盤を持つ可能性があるのではないかという筆者の考えに基づいている。これは、建築教育を通じて特定の建築能力を示すことではなく、すべての人間が持ちうる普遍的な思考能力はどのように育まれるのかという氏の興味を示していると言える。

3.3) エスキス指導における優位性の維持と論理性の導入

稲葉氏は、「建築に限らず様々な職業、また、伝統的な技芸において徒弟的感情を今日でも国民が広く共有し

保持しているのは我々の貴重な地の資源である。これが日本のものづくりの強さの源であり、ホリスティックと称するわが国の建築教育のスタジオが欧米に遜色なく質の高い建築家を輩出する陰で働いている。」^[6]と論じ、日本の建築教育におけるスタジオ（設計演習）の優位性が、伝統的な技芸における「徒弟的感情」やホリスティックな教え方に負う部分が大きいと認識した。同時に、その「不透明で論理性が希薄な教え方」を是正する態度こそが、日本の建築教育の優位性を保つ鍵であると述べた。この提言は、日本の精神的・文化的優位性を自覚しつつも、それを国際的に通用する論理性によって補強することで、専門教育の質の改善と普遍的な指導法の探求を目指したものである。

4. 氏の建築教育論が現代に与える示唆

稲葉氏が示した一連の研究対象（子どもから大学生の「取りこぼされている」層まで）の視野は、氏の関心が特定の対象者に向けた個別的な建築教育の改善でなく、普遍的な教育の地盤を整えることにあったことを示している。氏が提言した建築教育の役割は、単に技術と美術の折衷ではなく、歴史・文化・人間性・生活といった多層的な要素を包含する総合知であり、その多層性を活かして日本の教育界全体の水準を上げることにあった。現代の建築学・建築教育学が、社会の複雑化に伴いさらに専門分化を進める中で、稲葉氏が示した「専門知を普遍的な基盤の上に再構築する」という思想と方法論は、建築教育が社会の要請に応え、持続的に発展するための極めて現代的かつ重要な指針を与えている。

5. 参考文献

- [1] 稲葉武司, 今伝えたいトピックス ミッション・ポシブル, 建築雑誌, pp.40-41, 2005.3
- [2] 総合的な 学習稲葉武司さんのおはなし 楽々建築・楽々都市 子どもの空間・環境チャレンジワークショップ <http://news-sv.ajj.or.jp/kodomo/interview/inaba.html>, (2025.10.1 閲覧)
- [3] 田口純子, 米国の子どもの建築教育理論に関する事例研究 「建築と子供たち」カリキュラムの開発とその背景, 日本建築学会環境系論文集, pp.625-635
- [4] 稲葉武司, 総合的学習における建築の有効性, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (東北), pp.669-670, 2000.9
- [5] 稲葉武司, デザインプロセスと脳の働き-総合学習のためのノート-, 日本こども学会速記録 <https://kodomogakkai.jp/post-2.html> (2025.10.1 閲覧)
- [6] 稲葉武司, 建築設計教育におけるスタジオ方式の基礎的研究(Ⅲ)-エスキスの教育的機能について, 日本建築学会大会学術講演会梗概集 (東北), pp.711-714, 2009